金地金ノ價格騰貴ニ就テ

（大藏省令第二十八號ハ、經濟上ヨリ言ヘバ我國貨幣ノ本位制度ヲ變更シ、法律上ヨリ言ヘバ省令ヲ以テ法律ヲ改變セシモノナルベシ。）

河上肇

山崎博士ハ前月發行ノ『國家學會雜誌』（第三十一卷一五二一頁以下）ニ於テ、余ガ茲ニ掲グル所ト同一ノ標題ノ下ニ、貨幣ノ價値ト貨幣ヲ搆成スル物質ノ價値トノ關係ニ就キ、有益ナル一文ヲ公ニサレタリ。今余ガ同ジ問題ニ就テ此拙稿ヲ起ス所以ハ、博士ノ說ニ對シ敢テ異說ヲ唱ヘントニハ非ズ、只余ハ自己ノ立場ヨリ同ジ現象ニ對スル管見ヲ述べ試ミ、若シ其中ニ自ラ博士ノ所見ト異ル所アルナラバ、則チ之ニ就テ敎ヲ乞ハントト欲スルダケノモノデアル。

問題ハ、近頃我國ニ於テ金地金ノ價格騰貴シ、平生ハ一匁ノ價格約五圓ナリシモノガ、九月十九日ノ如キハ五圓七拾錢ニマデ騰貴シタルガ、吾々ハ此現象ヲ如何ニ見ルベキカト云フコトデアル。山崎博士ノ既ニ記述サレ居ル如ク、金價暴騰ノ直接原因ト稱セラルルハ大藏省令第二十八號デアル。ソハ九月十二日ニ公布サルルト同時ニ施行サレシモノデ、其條文ハ次ノ如クデアル。

金貨幣又ハ金地金ヲ輸出セントスル者ハ大藏大臣ノ許可ヲ受クベシ但外國ニ旅行スル者金貨幣百圓未滿ヲ携帶スル場合ニハ此ノ限ニアラズ

前項ノ規定ニ違反スル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

地金トシテ販賣シ又ハ使用スル目的ヲ以テ金貨幣ヲ蒐集、鑄潰又ハ毀傷シタル者ノ罪亦前項ニ同ジ

言フマデモナク、金地金騰貴ノ原因トナリシモノハ、此省令ノ第三項デアル。而シテ問題ハ、此省令ノ第三項ニ因ル金地金ノ騰貴ヲ何ト見ルカ、ト云フコトデアル。

＊

余ハ先ヅ、斯カル法令ノ下ニ於テ、金地金一匁ノ價格ガ、時トシテ五圓以上ニ騰貴スルコトアルハ、當然ノコトニテ毫モ怪ムニ足ラズト思フ。金本位國ニ於テ、金貨幣ト之ト同量ノ金地金トガ常ニ價値ヲ同ジウスル所以ハ、一方ニ於テハ自由造幣ヲ認メ、他方ニ於テハ自由鑄潰ヲ許シ、金貨幣ハ何時ニテモ金地金トナリ、又金地金ハ何時ニテモ金貨幣トナリ得ルコトニシテアルガ爲デアル。貨幣ト地金トガ價値ヲ同ジウスルニ就テハ、貨幣ノ價値ガ地金ノ價値ニ追隨スルノデアルカ、地金ノ價値ガ貨幣ノ價値ニ追隨スルノデアルカ、或ハ二者ノ間ニ相互的因果關係ガアルノデアルカ、學者ニヨリテ其所見ヲ異ニスル所アルベシト雖モ、何レニスルモ一方ニ自由造幣ヲ認メ他方ニ自由鑄潰ヲ許シ居ル限リ、貨幣ト地金トハ殆ド完全ナル交替性ヲ有スル故、其價値ニ差異ヲ生ズベキ筈ハ無イ。

我國ニハ、明治十一年一月十九日ノ大政官布告第二號ト云フモノアリテ、『通用貨幣ヲ鎔解シ又ハ其體面ヲ毀傷スル等其他總テ流通ノ用ヲ缺キ候所爲一切不相成候條此旨布告候事』ト規定シ居レドモ、右ハ無制裁ノ法規ナル故、實際ニ於テハ有レドモ殆ド無キガ如キモノデアツタ。大規模

ニ貴金屬細工ヲ經營シツツアル者ハ、其原料トシテ不純ノ地金ヲ買ヒ入レ、自家ノ手ニ於テ之ヲ製錬スルニ不便ヲ感ゼザレドモ、然ラザルモノハ、貴金屬細工ノ原料トシテ多クハ金貨ヲ鑄潰シタモノデアル。貨幣ハ造幣局ガ精巧ナル技術ヲ以テ造リ出シタルモノニテ、其量目及ビ純分ハ共ニ國家ノ保證スル所ナルガ故ニ、大體ニ於テ金地金ト金貨幣トガ常ニ同ジ價格ヲ有スル以上、必要ニ應ジテ貨幣ヲ鑄潰スハ、貴金屬細工業者ニトリテ極メテ便宜ナルコトデアツテ、社會ニトリテモ亦更ニ差支ナキコトデアル。サレバ余ハ年來、件ノ大政官布告ヲ以テ無用ノ法規ナリト考ヘ、ソガ今日マデ廢止サレザルハ、偶々立法者ノ見落シニ過ギザルベシト推察シテ居タ。文部省ニテハ、此大政官布告ヲ尊重シテ、中學校ナドノ理化學實驗ニ貨幣ヲ鎔解スルヲ禁ズル旨ノ訓令ヲ出シテ居ルトカ聞キ及ンダコトモアルガ、余ハ、當局ノ行政官ガ何故無用ノ法令ヲ廢止スルコトヲ提案セズシテ、却テ無用ノ束縛ヲ甘受シツツアルカヲ疑ツテ居タモノデアル。其ハ兎モ角、件ノ大政官布告ハ無制裁ノ禁令ニテ何ノ實力モナカリシモノ故、我國ニテハ最近ニ至ルマデ、金地金ノ價格ハ之ト同量ノ金貨幣ト常ニ殆ド同一デアツタノデアル。然ルニ最近ニ實施サレタル大藏省令第二十八號ハ從來無制裁ナリシ禁令ニ對シ新タニ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金テフ制裁ヲ附シタモノデアル。此制裁ノ爲ニ、久シク無力ニシテ全ク人ニ忘レラレ居タリシ大政官布告ガ、始メテ禁令トシテノ實力ヲ有スルコトト爲リ、貨幣ト地金トノ交替性ガ頗ル制限ヲ受クルコトト爲ツタ。地金ハ依然トシテ自由ニナリ得ルケレドモ、貨幣ハ最早自由ニ地金トナリ得ザルコトト爲ツタ。地金ト貨幣トノ間ニ價値ノ差額ヲ生ズルニ至レルハ當然ノコトデアル。實際ニ於テハ金

地金ノ甚シキ騰貴ハ只一時ニ止マリタルガ如クナルモ、今後同樣ノ現象ハ何時復ビ發生セヌトモ限ラヌ。少クトモ金地金ト金貨幣トガ微少ノ程度ニ於テ幾何カ價値ノ差額ヲ存スルコトハ、先キノ省令ノ存スル限リ、恐ラク今後ニ永續スル現象デアラウ。

*

ソノ一時的ナルト永續的ナルトヲ問ハズ、又ソノ顯著ナルト微弱ナルトヲ問ハズ、兎モ角現在ノ日本デハ、金地金ト金貨幣トガ價値ノ差額ヲ存シ得ル狀態ト爲ツタ。然ラバ此狀態ハ何ヲ意味スルカ。其解釋ガ余ノ第二ノ問題デアル。

先ヅ簡單ニ其結論ヲ述ブレバ、現在ノ日本ノ貨幣制度ハ、最早ヤ金本位制度デハナクナツテ、金貨幣本位制度トモ名クベキ一種ノ變態ヲ呈シテ來タノデアル。

貨幣法第二條ニハ、純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位トナシ之ヲ圓ト稱ストアルガ、之ガ日本ノ貨幣制度ノ根本デアル。卽チ日本ニテハ、圓トイフノガ貨幣ノ呼稱上ノ單位デアルガ、其單位ノ意味又ハ價値ヲ定ムル物體卽チ貨幣ノ本位ハ、金ノ地金デアル。今例ヲ貨幣以外ノモノニ取ツテ其關係ヲ說明スレバ、例ヘバ英米ニテ一瓦トイフ斗量ノ單位ハ、一定ノ溫度及ビ氣壓ノ下ニ於ケル純粹ノ水八・三三封度ダケノモノノ大キサヲ謂フノデアル。之ト同ジヤウニ一圓ヲ以テ貨幣ノ單位ト爲スナラバ、其ノ一圓トイフ單位ハ何ヲ意味スルヤヲ定メナケレバ勿ラヌガ、我國デハ卽チ純金二分ノ價値ヲ以テ之ガ基本ト爲スノデアル。此ノ如ク一圓ト云フ貨幣ノ呼稱上ノ單位ノ意味ヲ定ムル基本ノ物體ト爲ルモノガ卽チ貨幣ノ本位デアルガ、我國ニテハ其ガ金ナル故ニ、我國

ノ貨幣制度ハ卽チ金本位制度ナリト謂フノデアル。金本位制度トハ金地金本位制度ノ謂ニシテ、金貨幣本位制度ノ謂デハ無イ。卽チ金本位制度ニ在リテハ、貨幣ノ本位ハ、貨幣以外ニ存スル地金ニシテ、貨幣ソノモノデハ無イ。

然ルニ此ノ如ク貨幣ノ本位ヲ貨幣以外ニ置ク時ハ、其本位ノ維持ノ爲メ、一方ニハ自由造幣ヲ認メ、他方ニハ自由鑄潰ヲ許スコトガ必要デアル。斯クスル時ハ、既ニ述ベタル如ク、本位貨幣タル金貨幣ハ常ニ之ト同量ノ金地金ト價値ヲ同ジウスベク、之ニ依リテ始メテ貨幣一圓ノ價値ハ純金二分ノ價値ニ等シト云フヤウナコトニ爲ル。言ヒ換フレバ、貨幣法ニ於テ『純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス』ト規定セルコトガ、實際ニ於テ始メテ實現サレ得ルコトニ爲ルノデアル。

若シ之ト異リ、或ハ自由造幣ヲ認メズ、或ハ自由鑄潰ヲ許サザルコトトセンカ、既ニ述ベタル如ク金貨幣ト金地金トノ間ニ價値ノ差額ヲ生ジ得ルコトト爲ル。然ルニ一旦コノ二者ノ間ニ價値ノ差額ヲ生ゼンカ、其時ニ於テ、金地金ハ貨幣ノ本位タル地位ヲ失ヒ、金貨幣ソノモノガ貨幣ノ本位タルニ至ルモノデアル。例ヘバ五圓金貨ハ純金一匁ト交換サルベキ筈ノ所ヲ、二者ノ價値ノ間ニ懸隔ヲ生ジテ、五圓金貨ハ漸ク純金八分八厘（金地金騰貴シテ一匁ノ價格五圓七十錢トナリタリト假定ス）ト交換サルルガ如キ場合發生シタリトセヨ。貨幣法ニ規定セル本來ノ制度ヨリ言ハバ『純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス』ト規定セルコト故、純金八分八厘ト交換セラルル金貨幣（又ハ兌換券ノ類）ハ縱ヒ其表面ニハ金五圓ト記載シアリトスルモ、四圓四

十錢ノ價値ヲ有スルニ過ギザル筈デアル。乍併、實際ニ於テハ五圓ノ金貨幣ハ飽クマデモ五圓ニ通用シ、金地金ハ縱ヒ其量目八分八厘ニ過ギザルモ五圓ノ價格ニテ賣買セラルルコトト爲ルノデアル。卽チ貨幣法ニ純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ストアル規定ハ、全ク空文ニ歸シ去ル譯ニテ、之ヲ言ヒ換フレバ、貨幣ノ本位ハ最早ヤ金地金ナルコト能ハズシテ、金貨幣ソノモノトナルノデアル。此意味ニ於テ、明治十一年ノ大政官布告ハ貨幣法制定ノ結果、其第二條ノ精神ヲ貫ク上ニ於テ、解釋上既ニ廢止サレタト見ルベキモノデアルシ、從ウテ又今回公布セラレタル大藏省令第二十八號ハ、一片ノ省令ヲ以テ貨幣法ト云フ法律ノ或主要條文ヲ改變シタモノハト看做スベキデアル。省令ヲ以テ法律ヲ改變スルコトガ憲法上許容サルベキコトナルヤ否ヤハ、余ガ專門外ノ問題ナルガ故ニ姑ク舍ク。只余ノ茲ニ讀者ノ注意ヲ惹カント欲スルハ、實施以來去ル十月一日ヲ以テ滿二十年ニ達セントセシ我國ノ金本位制度ハ一今日實施滿二十年記念會ノ催シアルニ拘ラズ一之ニ先ツコト約三週日前ノ九月十二日ヲ以テ不完全ナル金本位制度トナリシト云フコト、否ナ言葉ヲ露骨ニセバ、從來ノ金本位制度ハ今ヤ廢止セラレテ、金貨幣本位制度之ニ代ルニ至リシモノナリト云フコトデアル。一片ノ省令デハアルケレドモ、ソハ貨幣ノ本位ヲ變更シタト云フ點ニ於テ、余ハ極メテ重大視スベキモノデアルト信ズル。若シ其ノ經濟界ニ及ボス影響ノ如何ニ至ツテハ、更ニ他日ヲ期シテ議論スルデ有ラウ。